

市民学コース 6 富士見の歴史

定員 60 人

## 第4回 江戸時代の川越藩の武家と庶民

# 川越藩主の将軍上洛供奉

## —村方人足達の上洛供奉—

講師 佐藤 啓子氏

(川越市・ふじみ野市文化財団保護審議委員)

日 時	6月29日(土) 午前10時から12時
会 場	鶴瀬公民館 第3集会室
講 師	佐藤 啓子氏 (川越市・ふじみ野市文化財団保護審議委員)
受講者数	39名

はじめに

本講座では、教科書の載っていない史実で、藩主の上洛で庶民が荷役の割り当てなどでどう動いたか文書から読み解く。

文久3年(1863年)11月、2月に引き続き将軍家茂は朝廷の要請で、再度京都に上洛することになった。

この時の川越藩主松平直克は、大老はなく、事実上のトップである政事総裁職の任にあり、家茂の御供を命じられた。11月の上洛は軍艦を使い日数の半減、街道の負担軽減を図った。

12月27日に軍艦に乗船した将軍家茂と川越藩主松平直克などと別に川越藩の家臣、それにお供した村方人足の人々の京都行きについて明らかにされた。

資料338:幕末御触書集成第1巻 泰平御臺場画圖…黒船が江戸湾に浮かぶ 寄港船に対し燃料、水、食料などの供給を許可、2回目の黒船の威嚇で、5か国と通商条約を締結)

天皇の勅許を得ずに通商条約を結んだことで、朝廷から呼ばれ京都に再度、上洛することになった。



幕末の力関係が明らかで、朝廷の勢いが増している。

資料339：大店がお年玉で配った武鑑 御総裁職松平大和守（直克）掲載  
参勤交代などの行列を見てどこの大名と分り便利

資料339：御下知状写 御座所へ参上の面々が書かれている

資料360～391 留守役大目付への書状 乗船、船中の報告

2～3ページ 「前橋藩松平家記録」第29～30巻 上洛の記録

以上を参照。佐藤先生からの逐次読み上げと分かり易い解説をしていただいた。



### 村方人足たちの京都行

11月28日に上洛には取り締まり世話役として頭取名主3名、小惣名主4名を出張させる。手当金2両、名字帯刀を許される。

各村は石高に応じて人足を割り当てられた

鶴馬村7人、水子村8人、針ヶ谷村1人など

資料：5ページ「大井町史 通史編」上巻参照

人足数は300人以上、馬50頭、約200人が5月まで滞在、帰国は中山道と東海道の2手に分かれる。

大井町頭取名主新井代助の記録、牛ヶ谷戸村小高泰助の書状から見て取れる人足達の様子を資料・書状を読み上げて紹介。大変具体的で、人足たちの難渋の様子が窺える。



牛ヶ谷戸村小高泰助の手紙からみる

「川島町史 資料編 Ⅰ近世」文久4年（1864年）正月28日

昼夜御供の御用が多く、道中くたびれても休むこともできず、金銭の下され物もなく、火の気もなく吹きさらしの中で難儀をした、不便至極…布団もない有様

（粗末な）小屋詰め人足178人に100枚の布団を自前で調達、焚き物の費用も自ら出さざるを得なかった、小高泰助書状

資料（補注）将軍の京都上洛に川越藩主が供奉し、領内から多くの農民が取り立てられて京都まで人足を務めた。

小高泰助はこの人足の差配役として同行、人足の様子を宮前村頭取名主鈴木久兵衛に書き送っていた。

1回に3メートルぐらいの長さの手紙で、人足を出した村ごと精算した帳面（35冊現存）と合わせ膨大な量になる。埼玉県立文書館に宮前 鈴木家文書寄託

人足一人当たり3両前後か、帰村状況からみると期間は、一番立ち12月16日又は二番立ち12月24日から5月初旬だった。143日の務めで、3両3分借用で金銭的には持ち出しが多く、負担が多かった。

資料：4ページ 村ごとの精算した書類のコピーを参照

資料：5ページ 「大井町史 通史編」上巻

文久3年12月35か村人足数及び出金額

以上のように幕末の将軍の御座船に乗り合わせた川越藩主と庶民の暮らしを京都上洛の人足にスポットを当てて講義をされた。